第1回　詩のボクシング兵庫大会

目指す多角的な表現方法

「詩のボクシング」大阪大会チャンピオン

「詩のボクシング」という競技がある。ボクシングリングに見立てたリング上に2人の“朗読ボクサー”が上がり、自作の詩を交互に朗読して、観客にいかに言葉を伝えられたかを競う、新しい形式のコンクールだ。

大阪でも過去2回「大阪大会」が開催されているが、小笠原淳さんは、第2回大阪大会のチャンピオンである。

ここでもう少し、「詩のボクシング」についての予備知識を一。音声詩人の楠かつのりさんが、1997年に「詩のボクシング」を発案し、日本朗読ボクシング協会を発足。2人の“朗読ボクサー”が、交互に10ラウンド（10朗読）を戦ってタイトルを競ったのが始まり。

99年からは、アマチュア対象のトーナメント戦が、全国各地で開催されるようになり、01年には第1回全国大会が開催されるまでにファンを増やしている。

「詩のボクシング」というネーミングから、「詩」だけで対戦するように受けとられがちだが、実際のリングには短歌や俳句、川柳のほか、エッセイや日記、童話など様々なジャンルが登場。また、朗読スタイルも単に原稿を読むだけでなく、詩吟や演劇、舞踏、ヒップホップなどを取り入れるなど、視覚で訴える参加者も。ただし、楽器などの鳴り物の使用は出来ない。そういった意味では、「詩のボクシング」より「朗読ボクシング」という方が理解しやすいかも知れない。

小笠原さんが優勝した第2回大阪大会は、昨年10月に市立弁天町市民学習センターで行われた。会場内には、一段高いところにロープを張ったリングが設営され、中央にマイクスタンドが立つ。観衆の最前列に楠かつのりさんら7人のジャッジ（審査員）が陣取り、約50人が参加した予選に引き続き、勝ち上がった16人によるトーナメント戦で行われた。

レフェリーに名前を呼ばれた選手が、青コーナーと赤コーナーに分かれてリング上に登場する。選手紹介のあと、レフェリーの「フ

「詩のボクシング」大阪大会チャンピオン　小笠原淳（おがさわら じゅん）さん

1974年、熊本県八代市生まれ。保育園時代から詩に興味を持ち、小学校低学年で早くも詩作を始めるも、高学年になるにつれ次第に創作意欲が減退し、断筆。中学以降は一転して部活動の卓球に打ち込み、高校時代には6回の全国大会（団体）に出場した。高校卒業後、北京への短期語学留学を経て94年に北京語言文化大学に入学。97年、同校を卒業し帰国。翌98年から留学時に知り合った友人の住む神戸市に滞在を続け、99年には就職も。ほぼ同時期に小学生以来途絶えていた読書や詩作を復活。以降、積極的に詩作を続け、02年の「詩のボクシング」大阪大会で優勝、チャンピオンに。現在は映像、声（詩）、音（音楽含む）が一体となった独自のライブに挑戦中。

ァイト！」の声と同時に開始のゴングが鳴り、まず1人が3分の持ち時間を使って自作の朗読パフォーマンスを繰り広げる。続いてもう1人が朗読。その直後にジャッジによる判定が下される。
準決勝までは、自作によって争われる。決勝戦は自作での対戦のあと、引き当てた課題をそれぞれ3分間の「即興詩」で演じる2ラウンド制だ。そして小笠原さんが、チャンピオンとなったー。

1996年　天安門広場にて

感性鋭い少年期 小学校2年で詩作

小笠原さんは、熊本県八代市生まれ。「保育園児のころ、北原白秋の『落葉松』や宮沢賢治の『雨ニモマケズ』などを母親に読んでもらい、それをそのまま口に出して復唱していました」というから、詩に対する係わり方は、はんぱではない。
自分で作品を作るようになったのは、小学校2年生のころだ。4年生の時には、作品名「雑草」で雑草の力強く飄々（ひょうひょう）とした生きざまを表現して、先生たちを驚かせたエピソードの持ち主でもある。
「派手な花よりも、野に這っているちっちゃな花が好きだったんです。小さな命にすごく惹かれるところがあって」と、当時を振り返る。周囲に対する観察力、雑草からも生命の慈しみをくみ取る鋭い感性が、この頃すでに育まれていたのだろう。
「良くいえばそうかも知れませんが、悪く言えば、ちょっと軟弱であったかなと（笑）。友達と元気よく遊ぶんだけど、その半面、生とか死とかに執着したり、深く物事を考える。恐らく観点も違ったんでしょうね」。
ところが、学年が進むにつれ、周囲の子どもたちとの「観点の違い」に疑問を感じはじめることになる。「みんな、楽しくやってんじゃないの。ねちねち字なんか書いてないで（笑）、一緒に遊んだりする方が健全じゃないか」という意識が急激に膨らんだのだ。「6年生のころは、全く書かなくなっていましたね」。

20年ぶりに詩作を再開 映像との融合

詩作と決別したあとは、部活の卓球に打ち込む青春時代を過ごしている。この卓球では、中学で全国大会（団体戦）に出場。高校でも6回連続でインターハイを含む全国大会（同）に出場するなど、目ざましい活躍ぶりだった。
この間、「八代弁を使っていた八代市から、熊本弁がスタンダードな熊本市内の高校に進学して熊本弁を喋る努力をし、それが上手くマスターできた」ことで、日本語を含む「言葉」に興味と自信を持つようになる。

北京語言文化大学卒業式

中国・北京の大学を選んだのも、「日本語が好きな分、その元になった言葉に惹かれた」からだ。とはいえ、卒業して帰国後の、スムーズな就職には結びついていない。「就職しなくても、作家など他のところで絶対やれるという、根拠のない自信があったのです。実際は違いましたし、現実は厳しかったですが（笑）」。
留学時代の友人を訪ねて立ち寄った神戸に、そのまま住み始めたのが98年春。アルバイトをしながら悶々（もんもん）と過ごすなかで、いつしか「小学生以来の詩作への意欲が蘇ってきて、感情が溢れるように活字に変わっていきました」という。
20年ぶりの詩作復活から5年。現在は業界紙の記者として仕事を持ち、家族もいる環境の中で、言葉の詩だけではなく、映像や音が一体となった「多角的な表現方法の模索」を続けている。その根底に流れるのは、「書き手からの一方通行でない、相手の心に残る双方向の詩」であり、「詩のボクシング」に応募した動機の一つも、「もっと外の世界の人にも聞いてもらいたい」という、強い信念からに他ならない。
小笠原さんが大阪代表として出場する第3回全国大会は、7月12日に東京・イイノホールで開催される。小笠原さんからの朗報を待ちたい。

〔参考〕詩のボクシング第3回大阪大会は2会場で開催される
○貝塚会場＝10月26日（予選会）11月23日（本大会）貝塚市民文化会館・コスモスシアター。
○弁天町会場＝平成16年2月28日（予選会）3月6日（本大会）市立弁天町市民学習センターで。
（文・脇本勤／写真・高島悠介）